

33カ国リレー通信



ブラジル連邦共和国

República Federativa do Brasil

ナショナル・アイデンティティとしてのフットボール

沢田 啓明

ブラジル人にとってのフットボールとは

「ブラジル人にとって、サッカーとは何ですか」

長年、ブラジル・サンパウロに住んでおり、フットボール・ジャーナリストとして活動していることから、日本のメディア関係者やフットボール・ファンからこう聞かれることが多い。

いつも同じ答えをしても面白くないので、そのときの気分で細部は変えるのだが、概ね、こんな言い方をする。

多くのブラジル人、とりわけ男性にとって、フットボールは単なるスポーツの範疇をはるかに超えています。

自らのアイデンティティとして特定のクラブを熱烈に応援し、ワールドカップでは老若男女がこぞってセレソン（ブラジル代表）を熱狂的にサポートします。

「フットボールは自分の人生その

もの。フットボールのない生活など考えられない」と言う人が大勢います…。

ヨーロッパ、ラテンアメリカ、アフリカのほとんどの国とアジアの多くの国において、フットボールは最も人気があるスポーツだ。その中でも、ブラジル人のフットボール・クレイジーぶりはつとに有名だ。

なぜブラジル人は、これほどフットボールが好きなのだろう。

いくつかの理由が考えられる。

私は、ブラジルのフットボールの成り立ちに大きな原因があると考えている。

フットボールは、1863年、イングランドで近代ルールが制定された（ただし、これは骨子であって、その後、細部はかなり頻繁に改正されている）。

以後、英国人の船員、商人、英語教師、留学生らによって世界各地（最初はたいてい港町）へ伝えられていった。

南米で最初にフットボールが伝わったのはアルゼンチンで、これが1867年のこと。1881年には、ウルグアイでもフットボールの試合が行なわれた。ブラジルへの伝播については複数の説があるが、一般には1895年とされている。つまり、アルゼンチン、ウルグアイ

より少し遅かったのである。

それでも、1901年にサンパウロでリーグ（当初はアマチュア）が始まると以後は急速に普及し、1915年には広大なブラジルのほぼ全州でリーグ戦が開催されていた。

初期の南米フットボールのプレースタイルは、イングランド伝来のロングキックだった。しかし、大柄で屈強なイングランド人に対抗するためスコットランド人がショートパス戦法を編み出し、20世紀初頭、スコットランド人の鉄道技師によってアルゼンチンとウルグアイへ伝えられた。

アルゼンチンとウルグアイでは、このスコットランド伝来のショートパス戦法にラテン系特有の器用さを生かしたドリブルが加味された。

そして、ブラジルは1916年に始まった南米選手権（現在のコパ・アメリカ）などでの両国との対戦を通じてショートパス戦法学ぶと、主として黒人や混血の選手たちが軽やかな身のこなし、器用さ、即興性などによって多種多様なフェイント、ドリブル、キックを編み出し、技巧的で創造性豊かな固有のプレースタイルを創り上げていったのである。

ブラジル人は、「フットボールを発明したのはイングランド人だ



ワールドカップ開幕戦が行われたサンパウロ・アリーナで取材中の筆者（撮影者一辻 修平氏）

が、我々はそれまで誰も考えつかなかったスタイルを発明したんだ」と胸を張る。

ブラジルは、ラテン系を中心とするヨーロッパ人、黒人、先住民族にアラブ系、アジア系などが加わった多元文化国家であり、そのことが独特のプレースタイルを育むことにつながった。

この独自のプレースタイルを、ブラジル人自身は「フットボール・アルチ(芸術フットボール)」と呼ぶ。

芸術的で、美しく、ブラジル人のみならず世界中のフットボール・ファンを魅了してやまない。「(アルゼンチンとウルグアイを除く)世界中のサッカーファンが、ワールドカップで自国代表の次にセレソンを応援する」と言われるゆえんである。

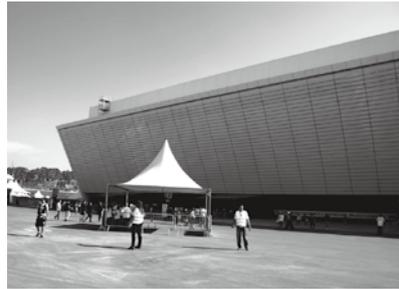
ただし、どれほど魅力的なスタイルを持っていても、勝負弱ければ世界中で広く支持されることはない。

ブラジルのフットボールは、見えて面白いだけでなく、実際に強い。2010年までのワールドカップ19大会で通算5回優勝しており、これは世界で最も多い。

1950年の自国開催の第4回ワールドカップの最終戦で隣国の宿敵ウルグアイに悲劇的な敗戦を喫したが(これは「マラカナンの悲劇」と呼ばれる。ブラジルのフットボールの歴史、さらにはブラジル国民のメンタリティーまでも変えたとされるこの衝撃的な出来事)の背景と詳細については、今年5月に上梓した拙著『マラカナンの悲劇―世界サッカー史上最大の敗北』新潮社刊で分析と描写を試みた)、この敗戦を糧として、以後のワールドカップ15大会で5度、すなわち実に3大会に1度の割合で

優勝を成し遂げている。

自分たちのフットボールは面白くて、しかも強い。強くて、しかも面白い。このことがブラジル人にとって大きな誇りとなっており、そのことがフットボールをナショナル・アイデンティティと呼べる存在とならしめているのだと思う。



サンパウロ・アリーナの外観(撮影:筆者)

フットボールに心を奪われた国

この原稿を書いているのは2014年ワールドカップの真っ最中で、この原稿が読者の皆さんの目に触れるときにはすでに結果が出ている。

フットボールは、ほとんどの場合、気温、湿度、風などの気象条件に影響を受ける屋外で行なわれ、手よりもずっと不器用な足と頭を使ってプレーする。審判の判定が試合の結果を左右することも少なくない。

それだけに、短期間のトーナメントではサプライズがあるのが普通。「サプライズがなかったら、そのことがむしろサプライズ」と言っている。

このフットボールの「定理」からすると、開催国であり、優勝候補最右翼とはいえ、他の強豪国を大幅に上回っているわけではないブラジルが簡単に優勝できるとは考えにくい。

順当なら準決勝でドイツ、決勝でアルゼンチンと対戦する可能性



が高い。

決勝戦の舞台は、64年前の大会と同じリオデジャネイロのマラカナン・スタジアム。仮にまた決勝で敗れたら、「第二のマラカナンの悲劇」と呼ばれるだろう。

しかし、実はブラジルが決勝まで勝ち進む保証はどこにもない。それまでに敗退して、リオへたどり着けない可能性も否定できないのである。

フットボールは極めて魅力的なスポーツだが、強い方がいつも勝つとは限らず、極めて残酷な一面がある。64年前の「悲劇」を通して、そのことをブラジル人は熟知している

すでに100年以上も前からフットボールに心を奪われているブラジル人は、今回のワールドカップの結果がどうであれ、このスポーツへの愛情と情熱を失うことはないだろう。

今後も、ブラジルは「フットボール王国」であり続けるにちがいない。そして、世界中のフットボール・ファンは、そのことに感謝しつづけるはずだ。

(さわだ ひろあき フリーのフットボール・ジャーナリスト、在サンパウロ)